

月刊 やちまなこ

2015.9.15 発行

No. 214

9 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

ススキの穂が陽射しを受け、キラキラと輝いている。短い夏も終わり、湿原を流れる風に初秋の気配を感じるようになった。辺りにはカラフトイバラの赤い実やサワギキョウの紫の花が彩りを添えている。まるで吸い込まれそうな蒼く澄んだ空、この空にも越冬のためヒシクイが姿を現す日も近い。

コッタロ川と湿原のほとりから

183 9月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

“セキレイのつがい遊ばせ秋耕こし”。大豊作をもたらしてくれた畑は、収穫し終えた順に耕して来春に備えるこの時季、土の中から這い出る虫達を捕食しようと野鳥等が右往左往する様が面白くて、ついつい彼等の方へ虫を投げてやるのです。一方、我家の敷地全体をすみかと決め込んだエゾシマリスは、困ったことに畑作物のうちの豆類が大好物で殆んどが食べられてしまいました。庭に設えた7つのエサ箱には常にたっぷりのヒマワリの実が用意されているにもかかわらず、あれやこれやと試食し美食家ぶりを発揮しているではありませんか。楽しみにしていたハスカップと木苺も一粒残らず彼等の胃袋にすんなりとおさまってしまい“出来秋はエゾシマリスの為にあり”。と云ったところ。それでもまあ、存分に楽しませてくれたことを感謝してのギャラだと思って、気持ちを切替えるべくベートーベンに没頭するしかありませんね。

ところで、8月25日(+3℃)を皮切りに、寒さが一足跳びに訪れ、庭のワタドロ林はすっかり落葉してしまいました。そこへ巣立った夏鳥達が旅立ちを前にエサ捕りに余念がなく、中でもアオジの幼鳥の美しい羽ばたきをパチリ！又、庭のツル池の魚を狙って飛来した山蟬の後姿もついでにパチリ！一瞬の輝きを御覧下さい。

さて、例年この時季の楽しみの一つが、ここならではの風物詩で、今年は、9月4日、午後5時40分、局地的短時間集中ごう雨が止んだ直後、急速に照り映える夕陽が、雲を追い払うと、七色の巨大アーチが、湿原上空を染め上げ、見とれている場合ではないと云って、またまたパチリ！丁度帰る直前の丹頂一家の長である♂親が、見張り台の上に登ったのですが、米粒大とは云うものの虹とツルが一つの風景の中にいる珍しい写真と云えましょう？

“晩秋の虹湿原をひと跨ぎ”

特筆すべきは、子沢山台風の襲来で、日本列島縦断しそうな勢いに北海道もこれから要注意！！水はけの悪くなってきた湿原に、どれ程の被害が及ぶかと心配でなりません。



あるこっと周辺では、8～9月にかけて、草丈が50～100cmのサワギキョウがサルルン沼付近の湿地に群生します。秋の湿原に彩りを添える青紫色の花は、下から上へと順に咲きます。横向きに咲く花の奥には蜜があり、それを吸いにやってくるマルハナバチの助けで受粉する仕組みになっています。今年も人知れずパートナーが大勢来てくれたようで、実が見えるようになってきました。

ワッペン作りからはじめる野鳥観察。



8月29日「鳥の刺繍ワッペンを作ろう」を行いました。参加者は、講師の林美加さんの作品から刺繍する鳥を決めて、下絵の輪郭から縫い始めました。糸の色選びや毛の生え方に沿って縫うことを指導してもらい、図鑑や写真で鳥の特徴をとらえて刺していました。接着芯を貼り、裏布を重ねて縫い、外側をハサミで切って完成です。カワセミ、ゴジュウカラ、キビタキ、ノゴマ、アカゲラの作品が出来ました。参加者から「この時間をもて嬉しかった」「本物の鳥を見たくなった」と感想がありました。



糸の色遊びで個性豊かなカワセミができました。

写真の原点を体験・・・針穴写真講座を開催。

5日、自然ふれあい行事「針穴写真講座」を開催しました。空き箱と0.2ミリの穴をあけたアルミ板、印画紙を使いカメラを組み立て、撮影について講師の伊藤淳一さんから説明を受けた後、撮影を始めました。晴天下でも撮影時間が1～2分かかりましたが、暗室で現像液に浸けた印画紙から画像がじわっと現れた瞬間に参加者から驚きの声、これはネガになるので、新しい印画紙に反転して写真に仕上げました。手間はかかりましたが、針穴写真独特の味わいのある写真が出来上がりました。



なべじゅんのとうろうろう日記 Vol.3 「なぜ私たちはタンチョウを愛するのか」

朝、道道1060号を歩いていたら、タンチョウのつがいに出会いました。近くに幼鳥は見られなかったのですが、繁殖しなかったと考えられる若いつがいです。

郷土館に来館される方の中には、「今朝タンチョウを見てきました！」と嬉しそうに話される方がいます。なぜ、私たちはタンチョウに特別な思いを抱くのでしょうか？実は、隣の国である中国の影響が見られます。

中国の明・清王朝時代、官僚の最高位を示す図柄としてツルが用いられ、権威を示す鳥との認識が広がります。それが、日本の朝廷や武家社会に伝わり、タンチョウは体制の権威＝高貴さのシンボルとされ、文学や絵画によく描かれるようになります。結果、私たちはタンチョウ＝めでたい鳥としての価値を加えていきました。でも、きっと理屈よりも、タンチョウは見た目が綺麗だから人を惹きつけるんですよね～。

渡邊 淳一（標茶町郷土館学芸員）



